

開倫塾 塾長 林 明夫

年頭にあたって

ソフトパワーの根源

開倫塾

塾長 林 明夫

あけましておめでとうございます。開倫塾塾長の林明夫です。今年も「開倫塾の時間」をよろしく
お願い致します。今朝1月1日の下野新聞の記事の中に、大きく一紙面を割いた「栃木県産業協議会」
の特集がありました。今年の栃木県経済を考えるという紙上座談会で、私も参加させていただきました。
まだご覧になっていない方は、1月1日付け/下野新聞の栃木県産業協議会のページを是非ご覧
下さい。

私がそこで一番訴えたかったことは、今後栃木県の経済、企業経営がどうなるかということです。
「開倫塾の時間」で毎回お話していますように、日本政府は、FTA(自由貿易協定)、EPA(経済連携
協定)というものをこれから先アジアのいろいろな国々と進めようとしています。それは、特に東ア
ジアの経済連携を進めて緩やかな経済体をつくりたいということであり、さらに具体的に言いますと、
関税を一気に、ヨーロッパのEUのような形で、ゼロまではいかないでしょうが5%位までに引き下
げたいということでもあります。そのようにすると、人の動き、お金の動き、ものの動きが非常に活発
になり、日本の企業や人が仕事で外国に進出しやすくなりますし、反対に、外国の企業や人々も日本
に来やすくなったり、日本で仕事がしやすくなったりして、国際化が一気に進展します。ただ、FTA
(自由貿易協定)については、アメリカとも結ばなければいけない、ヨーロッパとも結ばなければいけ
ないと言われ、世界各地と結ばれるような動きもありますので、もしかしたら日本も5年後くらいに
は先進国と開発途上国を含めたかなり多くの国々と自由に貿易ができるようになると思います。です
から、そののところがきちんと見据えて今から準備をしている企業や地域は生き残るけれども、何の
準備もしなければ生き残れないということになります。そのようなことを話しました。

具体的に言いますと、中国のWTO加盟で、自分のやっている会社や仕事がそのような打撃を受け
たところもあると思いますが、FTAが締結されるとそれ以上、10倍以上の影響が生じますので、そ
れに対する準備がしてあるかどうかです。今からそれをきちんとしておけば生き残れるし、しなけれ
ば企業も倒産になってしまいます。また、地域全体としても陥没してしまっただけでその地域がまったく立
ち上がれない状況になってしまうと、そのようなことを思いました。

では、生き残るためにはどのようにすればよいのでしょうか。日本が一番得意なのは研究開発ですから、各企業の持ち味というか、素晴らしいところを活かせるような研究をするための企業内研究所を創設したらよいのではないかと考えます。ホンダや日産など、素晴らしい会社は一所懸命研究開発をして、日本の工業を引っ張っているわけですが、工業のみならず、観光・サービス業、農業などのありとあらゆる産業分野においても、自分のやっている会社の中、企業の中、組織間に研究所をつくり、先ほど話をした FTA 締結後のことを考え、国際競争力のことを考えた上での企業研究所を作るのがよいのではないかとこのことを訴えました。

WTO の貿易品目の中に高等教育が入ってきますので、うかうかしていると、栃木県内にあるすべての大学、短大が国際競争の荒波にさらされます。ですから、国際競争力のない大学、短大、高等教育機関はすべて倒産というような状況にもなってきます。ですから、うかうかしてはいられません。改革は一気に進みますので、学校も準備をした方がよいのではないかと思います。そして、そのために企業内研究所を作った方がよいのではないかとこのことをお話ししました。また、サービスなどを支えるのは人間ですから、企業内大学(コーポレート・ユニバーシティ)を作って企業や組織を支える人材を自分の所で養成したらよいのではないかとこのこともお話ししました。

以前からお話しているように、権力・力・パワーには2つの意味があります。経済力・軍事力で人を制圧するというハードパワーと、人の魅力で他人を引きつけるソフトパワーです。時には設備や資金などのハードパワーの面も大事ですが、それを補ったり乗り越えたりするものとして、自分達の会社・地域や自分自身を磨き込むことによって会社・地域・自分の魅力を増し、色々なものや他人を引きつけるソフトパワーも大事であるということですね。ソフトパワーの根源は、価値観や文化、伝統、物事の考え方というようなものです。その辺りで、日本・栃木県・自分の会社・組織のよさをできる限り考えながら、自分自身のよさを引き出す、そしてソフトパワーを磨き込む。このようなことをすれば素晴らしいのではないかとこのことを、1月1日付下野新聞の栃木県産業協議会の紙上座談会でお話させていただきましたので、この放送でも紹介致しました。

今年1年もどうかよろしくお願い致します。